

先 史



処女塚と東西の求女塚『撰津名所地図』より（神戸市立中央図書館所蔵）

先土器時代の有古尖頭器が住吉町東ノ平で発見されたと言われるが、詳細はわからない。本山町小路井戸田からは縄文時代の石匙（皮はぎ器）などが出土しており、西岡本では縄文早期の県下でも最も古い竪穴住居跡が見つかって、原始時代からこのあたりは、日あたりのよい南向きの斜面で飲み水もゆたかであったため人々の生活に適していたようである。しかし、このころの生活はまだよくわかっていない。

弥生時代になると、住吉町から粕あとのついた土器がみつきり、保久良神社境内などでは石庖丁（稲の収穫用石器）が出土して、農耕生活が営まれていたことを示している。また、住吉町渦ヶ森・本山町森・同町中野・本山南町・北青木から発見された合計五つの銅鐸や、保久良神社境内で見つかった銅戈などは、当時の金属器の使用を示している。土器の出土によると、その当時の人々が赤塚山や金鳥山中腹に高地性の集落を作って生活していたことがわかる。また、保久良神社境内に今も残る巨石群は、当時の人々の信仰の場・岩座だと思われる。

農耕生活の発展は、社会に貧富の差を生みつつ、各

地に集落の拡大をもたらしした。その中で成長した豪族たちは、三世紀末以来、大きな古墳を築いた。大陸の先進文化の吸収も一段と活発になった。このころの文化を古墳文化とよぶ。古墳時代の前期には、御影塚町の処女塚古墳、岡本のヘボン塚古墳、住吉宮町の東求女塚の三基の古墳が築かれている。ヘボン塚古墳や東求女塚古墳からは鏡や玉類が出土している。処女塚古墳は、前方後方墳であることが調査で判明した。

中・後期になると、JR住吉駅近辺の住吉宮町遺跡では帆立貝式古墳である住吉東古墳をはじめ、これまでに四十基以上の平地に築かれた方墳が見つかっている。これらの古墳からは須恵器などの土器のほか、巫女や馬などの形象埴輪や円筒埴輪と鉄刀などが出土している。また山麓部に横穴式石室をもつ多くの群集墳が築かれた。今でも神戸薬科大学構内に横穴式石室をもつ古墳の一つが現存する。

最近の区内の発掘調査では、奈良時代から室町時代の生活を物語る遺跡も見つかっている。

東灘区内の主な遺跡

—先土器・縄文・弥生・古墳・
古代・中世—

時代	遺跡名	位置	出土状況
縄文	井戸田遺跡	本山中町3丁目	海拔25mの山麓部の井戸田弥生遺跡から、縄文時代のものと思われる堅型・横型の石匙が採集された。
	西岡本遺跡	西岡本6丁目	縄文早期の堅穴住居2基。だ円押型文の土器片。(古墳や平安末の水田跡も確認されている。)
弥生	坂下山遺跡	森北町6丁目	海拔80mの尾根はしに弥生中期の壺・高杯などの土器・石器(石鍬・石錐・磨製石庖丁など)散布。
	森北町遺跡	〃	海拔25mの扇状地上端に中・後期の多数の土器(完形の長頸壺一点を含む)や石鍬・石錐・面子などの石器が出土し、弥生時代の住居跡かと考えられる。昭和61年2月に長さ4.2cm、幅2.7cmの櫛歯文をもつ前漢鏡の一部が発掘された。近畿では2例目。また、韓式系土器も出土し、大陸文化や朝鮮半島とのかかわりを示している。
	森西町遺跡	森北町3丁目	海拔16mの扇状地、中期の櫛描文土器・石鍬・石錘。
	神戸薬科大学構内遺跡	本山北町4丁目	海拔95mの山腹から、弥生後期の土器片。
	北畑垣内遺跡	本山北町5丁目	海拔145mの山麓から高杯。
	小路出口遺跡	本山北町2丁目	海拔25mの扇状部から弥生後期の土器・石鍬。
	金鳥山遺跡	本山町北畑	海拔200mの山腹に中期末の土器・石鍬の散布。2基の堅穴状遺構。
	保久良神社遺跡	〃	海拔180mの山腹に中期の土器・石器(石鍬・石斧・石錘・石のみなど)多数出土。周辺に巨石を組み合わせた磐座と思われる祭祀遺跡あり。南西すみから銅戈が出土した。
	井戸田遺跡	本山中町3丁目	海拔25mの山麓から土器・石器、弥生前期。
	岡本梅林遺跡	岡本6丁目	山腹から土器・磨製石斧などの石器。弥生集落のあとかと思われる。
	深江遺跡	青木4丁目	本庄小学校庭敷地から、蛤刃型石斧などの石器や弥生式土器が多数出土し、住居跡かと思われる。

時代	遺跡名	位置	出土状況
弥生	荒神山遺跡	住吉台	海拔120～170mの山頂尾根部に弥生中期末から後期の土器・石鍬などの石器が散布。16基の住居址、2基以上の土壙が点在。
	赤塚山遺跡	住吉山手	180mの山腹に、弥生中期の土器。
	森遺跡	森北町6丁目	外縁付鈕Ⅱ式の四区画袈裟櫛文の古の(新)式銅鐸の単独出土。
	生駒遺跡	本山北町4丁目	扁平鈕式の六区袈裟櫛文の銅鐸の単独出土。
	渦ヶ森遺跡	渦森台1丁目	扁平鈕式の四区袈裟櫛文の銅鐸の単独出土。
	本庄町遺跡	本庄町1丁目、2丁目	弥生時代前期水田址。
	本山遺跡	本山中町、本山南町、田中町	銅鐸のほか、4～5点の大型石庖丁、磨製石剣など出土。
古墳	深江北町遺跡	深江本町、深江北町2丁目	弥生時代末～古墳時代初めの円形周溝墓11基、周溝内に供献土器多数。古墳時代後期の竪穴住居址。
	住吉宮町遺跡	住吉宮町、住吉東町、住吉本町	古墳時代初めの方形周溝墓、水田址。古墳時代後期小型方墳40数基、住吉東古墳(帆立貝式。全長42m)馬形埴輪、人物埴輪、喪屋、竪穴住居址10数棟。
	へぼソ塚古墳	岡本1丁目	北西むき、全長60m余の前期の前方後円墳。舶載鏡6・玉類の出土。
	東求女塚古墳	住吉宮町1丁目	北西むきの前方後円墳で、全長80m。前方部は幅42m、長さ42m。後円部は直径47mだったと推測される。8面の銅鏡・車輪石・勾玉・刀が出土し、竪穴石室の中に木棺が納められていたと伝える。
	処女塚古墳	御影塚町2丁目	南むきの前方後方墳。全長70mで前方部は幅32m、高さ4m、後方部は幅39mで高さ7m。主体部は不明。前方部から小型箱式石棺や勾玉が出土。葺石確認。『万葉集』に歌われ『太平記』にも記載されている。大正11年に史跡に指定され、昭和60年に遺跡公園として公開。

時代	遺跡名	位置	出土状況
古墳	八幡谷古墳	岡本八幡谷	横穴式石室をもつ円墳。組合式石棺が出土し、馬具・武具・鉄斧・鉄鍬・須恵器などが採集されている。
	坊ヶ塚古墳	住吉本町1丁目	全長約40mの南北方向の前方後円墳のようだが、出土品の記録もなく詳細不明。
	伊賀塚古墳	御影3丁目	詳細は不明だが、6基の古墳があったともいわれる。
	生駒群集墳	森北町～本山北町	山麓部に後期古墳が数基あったようだが詳細は不明。神戸薬科大学構内にあった円墳の横穴式石室のみ保存されている。
	岡本梅林群集墳	本山北町～岡本	岡本梅林内に群集墳があった。刀・土器が多数出土したといい、くりぬき小型石棺や家型石棺が出土している。
	鴨子原群集墳	鴨子ヶ原	山中に6基の円墳など群集墳があったと伝えるのみ。詳細不明。
	郡家遺跡	御影郡家・御影一帯	郡家字城ノ前からは、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・土壙・柱列が発見され、子持勾玉・須恵器・土師器・鉄刀片が出土。御影中町からは、古墳時代の柱穴群・土壙・須恵器が出土。
古代・中世	郡家遺跡	御影郡家・御影一帯	郡家中町からは、奈良・平安時代の緑釉陶器片と柱穴群、鎌倉時代の水田址と柱穴が確認された。郡家大蔵からは奈良・平安時代の掘立柱建物や中世の暗渠などが発見された。摂津国菟原郡衙の跡かと考えられる。
	西岡本遺跡	西岡本6丁目	縄文早期の住居跡・古墳とともに、平安末期の水田址、中世の石工仕事場址。
	森北町遺跡	森北町4丁目	平安時代の厄よけの墨書木簡、げた(縄文～鎌倉の集落跡)中国製白磁などが出土し、壮官の屋敷跡と推定。

銅鐸の出土

昭和九年（一九三四）、住吉町渦ヶ森（今の渦森台一丁目）の山中で道路工事中に銅鐸が発見された。総高四十七・七cm。扁平鈕式で四区袈裟櫛文をもち各区内に四頭渦文が鑄出されている。鈕の三か所に双頭渦文の飾耳があり、鱗にも飾耳が三つ付されている。この鐸では、ことに内部に環状の装置があつて、銅鐸の用途を考えるうえで、注目された。おそらくこの環に舌をつるして、音をたてたと考えられたのである。出土地には記念碑が建てられている。

このほか区内では、中野字生駒（今の本山北町四丁目）および森坂下町（今の森北町六丁目）、本山南町八丁目からも銅鐸が出土している。

昭和三十三年（一九五八）出土の森銅鐸は、外縁付鈕式で総高三十三cm。四区袈裟櫛文の区画内に、四頭渦文がある。左下区画内の重弧文列上に三名の人物像が描かれ、下辺横帯の文様は重弧文である。

生駒銅鐸は、昭和三十九年（一九六四）に神戸薬科大学構内で発見された。高さ五十二・八cm、扁平鈕式で、

複線の袈裟櫛文により六画にわけられている。

本山南町八丁目の本山遺跡から平成二年（一九九〇）に出土した銅鐸は、高さ二十一cmと小型の扁平鈕式で四区に分けられた袈裟櫛文が鑄出されている。特にこの遺跡は、市内で初めて平地から銅鐸が発見された点で注目され、長さ三十六cmもの大型の多くの石庖丁や土器も出土している。

弥生中期から農耕集落が拡大されて原始的な国が成立するが、それらの規模が、このような金属宝器の分布状況から推察される。



渦ヶ森銅鐸（東京国立博物館提供
URL：<https://webarchives.tnm.jp/>）



生駒銅鐸
(国立歴史民俗博物館提供)



森銅鐸
(東京国立博物館提供
URL : <https://webarchives.tnm.jp/>)

岡本一丁目、阪急とJRとの間に、古墳時代前期の西北西むきの前方後円墳があった。もとその位置を岡本字マンパイといったが、町名改定でこの地名も消滅し、同様に古墳の方もほとんど姿をとどめていない。明治二十八年(一八九五)の発掘などで、勾玉・管玉・石釧のほか六面の銅鏡が後円部堅穴石室から出土しており東京国立博物館に所蔵されている。それらはすべて船戴鏡で同范品のある三角縁神獸鏡二面を含んでいる。古く、全長六十三・三五m、後円部の直径三十二・二mで、高さ約三・六二mと、記録されている。

へボソ塚古墳



本山銅鐸
(神戸市埋蔵文化財センター提供)



へぼソ塚址

へぼソという名は十六世紀に初めて現れているが、その意味は不明。へ岡本のオサバに立てるへぼソ塚、布織る人は岡本にありという古い里うたがある。しかし、『撰津名所図会』にも「かくの如くひなびたる節ふしにて諷うたふ。其由致をしらず」と、すでに江戸時代にこの歌の意味もわからなかったようである。

旧正月二日にこの塚のあたりでは、織姫が布織る音がきこえるとか、この塚の松を伐る者には祟りがあるとか伝え、また在原業平ありはらのなりひらの墓だともいう。延宝三年（一六七五）以来しばしば岡本の宝積寺でこの塚の供養が行われてきた。付近に二十の塚があったというが、今ではうかがうすべもない。

東求女塚古墳

住吉宮町一丁目九
阪神住吉駅

阪神住吉駅の東方に求女塚東公園がある。塚は阪神電車の施設工事によってくずされてしまったが、明治五年（一八七二）の発掘などで碧玉製の車輪石、曲玉、八面の銅鏡、太刀などが出土した。銅鏡のうち四面が三角縁神獸鏡で、その中の一面は同范品がある。四世紀後半に築かれた北西むきの前方後円墳である。

伝説では、土地の若者と、芋屋の宇奈比（菟原）処女を争った血沼（茅渟ちぬめ）男（19ページ参照）の墓だと言いつたが、おそらくこのあたりで海上交通などとも関係していた豪族の墓であろう。

明治十六年（一八八三）の記録では「封土の高さ一丈、周囲八百四十七間、積面一反四畝二十七歩」とあり、全長八十m、前方部は幅四十二m、長さ四十二m、後円部の直径四十七mと推測される。昭和五十七年（一九八二）の発掘調査でも葺石と周隍が確認され、須恵器・土師器・土錘などが出土した。ただし、埴輪は確認されていない。



東求女塚古墳の跡

おとめづか 処女塚古墳

御影塚町二丁目十
阪神石屋川駅

御影塚町に現存する処女塚古墳は、旧海岸線―ほぼ国道四十三号線―ぞいの砂堆状地上にある。砂堆状地に、盛土によって築かれた古墳で、攪乱がひどいが、昭和五十四年（一九七九）からの調査で古墳時代前期に築かれた南むきの全長七十mの前方後方墳であることが確認された。

前方部は幅三十二m、高さ四mの二段築成で、後方

部は幅三十七m、高さ七mの三段築成である。斜面には石が葺かれ、くびれ部に近い前方部東側から小型の箱式石棺と滑石製勾玉が発見された。前方部、くびれ部からは鼓形器台と壺形土器が見つかったが、主体部は不明である。古墳時代にこの地域を支配していた豪族の墓と考えられるが、『万葉集』に歌われている菟原処女の伝説から、この名がある。

求女塚出土の銅鏡

(東京国立博物館提供 URL : <https://webarchives.tnm.jp/>)



『太平記』には、この塚上で討ち死にの覚悟をした
新田義貞の闘いぶりが描かれている。
大正十一年（一九二二）に史跡に指定され、昭和
六十年（一九八五）には遺跡公園として整備され公開
された。



昭和 55 年発掘調査現状図
(神戸市埋蔵文化財センター提供)

処女塚古墳 (航空写真) (神戸市埋蔵文化財センター提供)



処女塚の伝説

この東明あきみの処女塚ぢよめづかを中心に、東西それぞれ約2kmの地に、処女塚の方に向いた前方後円墳こごでんと前方後方墳があった。住吉川下流西岸の呉田ごでん（今の住吉宮町一丁目）の塚は東求女塚ひがしむとめづか、都賀川下流西岸の味泥みどろ（今の灘区都通三丁目）のものは西求女塚とよばれ、これらの三塚にまつわる悲恋の伝説があった。すでにこの伝説を、



田辺福麿の歌碑（処女塚公園内）

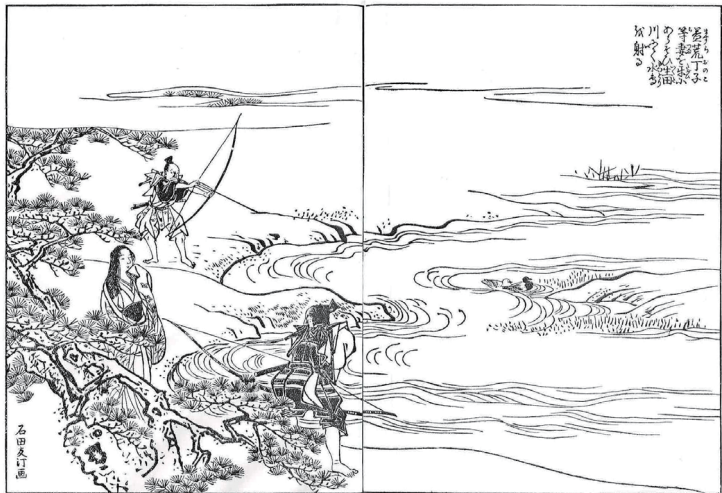
万葉の歌人三人ー高橋虫麿・田辺福麿・大伴家持ーが歌っているから、かなり古い伝説だったことがわかる。虫麿の歌によると、次のようにその古態のすじが組立てられる。

このあたり葦屋あしやの美しい菟原処女うなびおとめに、多くの人が言いよった。中でも、和泉の国から来た血沼ちぬめ（小竹田しのた）むとこ壮士と、この地の菟原壮士の二人がせりあつて求婚した。彼らは太刀をにぎり弓を取って「水に入り火にも入らむと立ち向ひ競」つたという。処女は、それを見て、私のような者のために立派な若者を争わせたうえは、この世で誰とも結婚できない。あの世で待つていよう、と母親にささやき嘆きつつ死んでしまった。その夜処女をゆめに見た血沼壮士は、彼女が好いていたのは、自分だったのだと知って、後をおつて死んでいった。遅れた菟原壮士は天をあおいでくやしがつたすえに、また後をおつて死んでしまった。そこで縁者は集まつて「永き代に標しるしにせむと、遠き代に語り継つがむと、処女墓ぢよめづか、中に造り置き壮士墓むとこづか、此方彼方に造り置ける」と虫麿は歌っている。

処女塚公園内には、田辺福磨の「古の小竹田壮士の妻問ひし、菟原処女の奥津城ぞこれ」の歌碑がある。後世まで、この伝説は人の心をうち、多くの文学作品の素材となっていく。

平安時代になると『大和物語』は二人の若者が、美しい水鳥を射あつて処女を競つたと、話の筋をふくらませ、三人の死を生田の地名とむすびつけて舞台を生田川へと移した。室町時代の謡曲『求塚』も、森鷗外の戯曲『生田川』でも、それが受けつがれてゆくが本来は、この東神戸の三基の古墳にまつわる伝説であった。

しかし考古学的には、街道ぞいの三基の古墳は、築造年代にかなりの差があるため、この伝えを史実とみることはできない。おそらく古墳築造から数百年たつて、被葬者のこともわからなくなり、奈良時代の人々が伝えていた説話だったのであろう。



水鳥を射る壮士たち（『摂津名所図会』より）

本山の群集墳

以前は、森から中野にかけて、山麓部に古墳時代後期の群集墳が散在していたが、今ではほとんど消滅してしまった。生駒古墳群の中では、わずかに神戸薬科大学構内に、横穴式石室が保存されている。

その西方にあった岡本群集墳も、すでにかつての姿をうかがえないが、八幡谷古墳からは横穴式石室の中で組合せ石棺・馬具・武器・斧・鏃・須恵器が出土した。また、もとの梅林内にあった古墳には、家型石棺や小型のくりぬき石棺などが埋葬されていて、小玉・刀・紡錘車が出土した。



神戸薬科大学構内に残る後期古墳



住吉宮町遺跡第24次調査発掘現場（神戸市埋蔵文化財センター提供）



伏見地震の地滑りで移動した井戸
（住吉宮町遺跡第23次調査）（神戸市埋蔵文化財センター提供）